

きねん

広報誌“きねん”創刊のご挨拶

広島記念病院 院長 中井志郎



このたび、病院を情報発進の基地にしようという年来の念願が叶いまして院外に向かったの広報誌「きねん」第1号を発刊する運びとなりました。

私は、平成10年4月1日付で院長に就任、また、同年6月1日の新病院竣工ののち、「新しい革袋には新しい酒を！」の言葉通り、21世紀の医療を見すえた病院の管理、運営に力を注いで参りました。

そのことが病院の中で、いろいろなところに息吹き始めていることを感じております。

これらのことは、日頃から広島記念病院を支えてくださっている病病連携・病診連携の皆様方をはじめとする関係各

位の方々のご高配とご支援の賜ものと存じております。深甚よりの感謝を申し上げます。

この病院ニュースを通して、当院の新生胎動の動き、さらなる飛躍に向かっていく病院の心、職員の意気込みを見ていただければ幸いに存じております。

さらなるご指導、ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

広島記念病院のシンボルマークが決まりました。

円内の3つのハートは、病院理念の安心の心・満足の心・信頼の心を、また、医療・保険・福祉のサービスを表現しています。



それらに欠かせないあたたかなコミュニケーションをピンク2色で、またそれらによつて得られる満足感、やすらぎをミントグリーンで表現しました。

まわりを囲む帯の色は落ち着き、やすらぎを表現しています。



広報誌“きねん”の題字は増田哲彦顧問の揮毫です。

診療科紹介 内科

診療部長 河村 寛



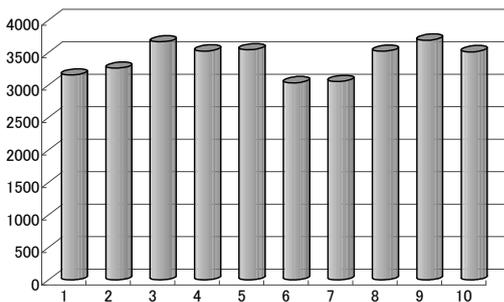
広島記念病院内科には 8 人の医師がいます。すべての医師が内科全般を広く診療すると共に専門領域を持っています。胃腸は熊本（昭和 54 卒）平賀（平成 2 卒）が、肝臓は中村（昭和 57 卒）が、循環器一般は佐倉（昭和 54 卒）が、肝胆膵は河村（昭和 53 卒）が、胆・脂質は堀川（昭和 63 卒）が、最も得意としています。木下（平成 7 卒）島（平成 8 卒）は消化器を中心に診療しています。

一般に内科が病院において最も求められている役割は、病気の診断をつけることです。診断をつけるには種々の検査が必要です。広島記念病院において内科が行っている検査は、腹部エコー（年間 6340 件）、食道・胃内視鏡（年間 3500 件）、大腸内視鏡（年間 1400 件）、超音波内視鏡、内視鏡的膵胆管造影、心エコー、腹部血管造影などです。画像診断における役割の重大さは、放射線科（CT、MRI など）と双璧をなしています。特に、最も症例数の多い消化器疾患診断のためには、即日、食道胃内視鏡、腹部エコーを行い診断しています。

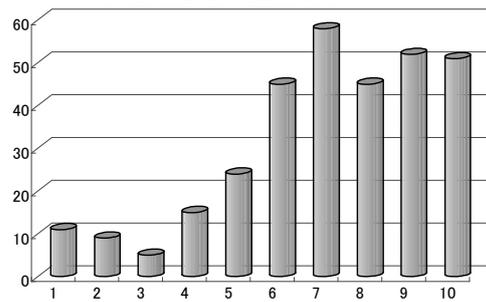
他方、内科が最も頻回に利用する検査器具である消化器内視鏡、腹部エコーを使用した治療手技が発達してきました。食道癌、胃癌、大腸癌の内視鏡的切除。エコー下経皮胆道ドレナージ、内視鏡的総胆管結石摘出、内視鏡的胆道ステント挿入、肝細胞癌への経皮的エタノール注入、マイクロ波焼灼治療です。当院における治療症例数は多く、連日、担当医が、治療を行っています。



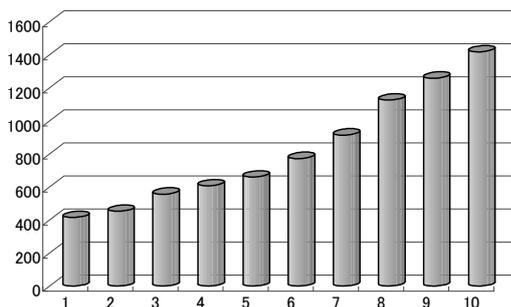
上部内視鏡件数



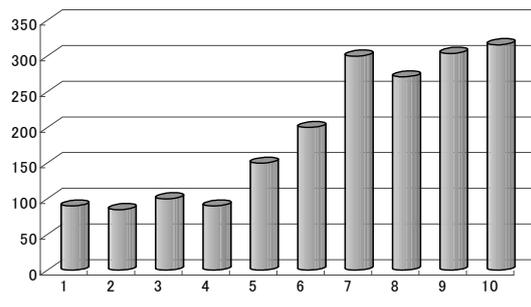
胃腫瘍に対する内視鏡的処置件数



下部内視鏡件数



大腸腫瘍に対する内視鏡的処置件数



診療科紹介 外科

外科医長 藤本三喜夫



平成3年から工事に着手した新病院(全250床)が平成10年5月に完成いたしました。

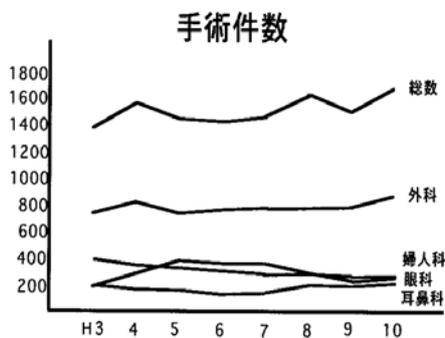
ゆったりとした個室、各階ごとにフロアーの色の变化を持たせ、さりげなく絵画を配した安らぎを感じさせる新病院となりました。機会があれば一度見学においでいただければと存じます。

さて、現在の当科のスタッフは、増田哲彦顧問、中井志郎院長をはじめ、藤本三喜夫(昭和56年卒)、山東敬弘(昭和58年卒)、宮本勝也(昭和59年卒)、尾形 徹(平成7年卒)、川本 純(平成7年卒)の計7名です。

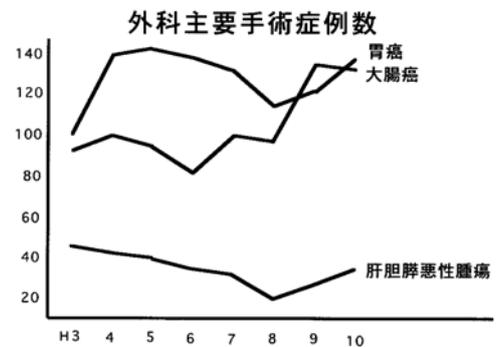
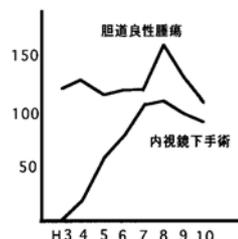
増田顧問は、外来診察・病棟回診・手術と若者顔負けのバイタリティーで仕事をなさり、かつわれわれ若手スタッフを暖かく見守り御指導いただいております。中井院長は、多忙な院長職のかたわら、超人的なパワーで週6件以上の手術をこなされ、さらに学会・研究会活動と、まさに広島記念病院の“顔”としての大車輪の御活躍であります。藤本は、自動吻合器・縫合器を駆使しつつ、安全確実に質の高い消化管再建法を摸索しております。山東は、とくに肝胆膵領域の手術に強い関心を示し、その道のエキスパート目指し頑張っております。宮本は、腹腔鏡下手術から肺手術まで幅広い領域をカバーすべく、日々努力しております。尾形・川本は、メスの限界を越えたともいえる高度進行癌症例に対して、粘り強く温熱療法を併用することにより、徐々にではありますが実績をあげつつあります。



新病院の完成、MRIをはじめとする最新鋭機器の導入と、最近の当院のハード面での充実は目をみはるものがあります。今後はさらなるソフト面の充実をはかり、確固たる病診連携に支えられた広島の消化器病センターを目指し、スタッフ一同力を合わせて努力いたす所存でありますので、諸先生方のますますの御指導・御支援を頂きますようお願い申し上げます。



内視鏡下手術症例
症例数 H10までの手術



胆嚢摘出術	594例
鼠径ヘルニア根治術	66例
肺部分切除術	31例
潰瘍穿孔大網充填術	17例
肝マイクロ波凝固壊死療法	15例
腹腔鏡併用大腸切除術	10例
虫垂切除術	3例
胃部分切除術	2例
イレウス癒着剥離術	1例

診療科紹介 耳鼻咽喉科

耳鼻咽喉科医長 屋敷建夫



耳鼻咽喉科疾患全般、アレルギー、眩暈、音声言語、頭頸部腫瘍、外傷等の患者さんが受診されます。

一般的には、扁桃腺手術、鼻の手術、耳の手術、唾液腺の手術などがあります。

頭頸部腫瘍、外傷に対して(例えば、喉頭癌、甲状腺癌などの腫瘍、鼻骨骨折、吹き抜け骨折、顔面・喉頭・気管外傷など)診断、手術、治療を行っています。骨折等については、手術時期を失することのないように行っています。悪性腫瘍(扁平上皮癌)に対する放射線治療に関しては、他病院のお世話になっています。特に、頸部腫瘍(耳鼻咽喉科の専門領域)の検査、診断に力を入れている。頸部転移癌であれば、原発の部位の発見に最大限努力しています。

過去約 24 年間で、当科で組織採取して判明(病理組織学的検査)した悪性腫瘍症例は、219 例(表)で、喉頭癌 47 例、甲状腺癌 46 例、悪性リンパ腫 33 例の順である。頸部転移癌の原発不明癌は、17 例である。その内 6 例は、時間経過で判明しています。

他にアレルギー性鼻炎に対する CO2 レーザー治療にも精力的に取り組んでいます。

耳鼻咽喉科全般に、精力的に診断治療に力をいれています。これも、恩師、黒住静之先生の教えの賜物と感謝しています。

スタッフ 古城門恭介

外来診察日

午前 月・火・水・木・金(8:30~11:00)

午後 月・金(13:00~14:30)

広島記念病院耳鼻咽喉科

悪性腫瘍症例(病理組織)

1975. 8~1999. 10

喉頭癌	47(♂	45・♀	2)
舌癌	23(♂	12・♀	11)
上顎癌	9(♂	7・♀	2)
下咽頭癌	15(♂	15・♀	0)
上咽頭癌	5(♂	3・♀	2)
中咽頭癌	9(♂	2・♀	7)
口腔底癌	1(♂	0・♀	1)
唾液腺癌	4(♂	2・♀	2)
甲状腺癌	46(♂	5・♀	41)
悪性黒色腫	4(♂	2・♀	2)
ML	33(♂	19・♀	14)
その他	6(♂	4・♀	2)
原発不明癌	17(♂	10・♀	7)
合計	219(♂	126・♀	93)

